

話す意欲を高め、積極的に話合いに参加する生徒の育成
～傾聴の「トレーニング」と「自己評価」を取り入れた指導過程の工夫を通して～

宮崎市立宮崎東中学校
教諭 荒木 光司

目 次

I 研究主題	2-1
II 主題設定の理由	2-1
III 研究目標	2-2
IV 研究仮説	2-2
V 研究内容	2-2
VI 研究計画	2-2
VII 研究構想	2-3
VIII 研究の実際	2-4
1 理論研究	2-4
(1) 学習指導要領における話合いの位置づけ	2-4
(2) ピア・サポートの精神を生かした話合い	2-5
(3) 話合いにおける傾聴の意義	2-7
2 実践研究	2-9
(1) 話合いにおける生徒の実態把握	2-9
(2) 傾聴を重視した話合いの手立て	2-9
(3) 傾聴を重視した話合いのモデルと指導過程	2-10
(4) 検証授業に向けて	2-11
(5) 検証授業Ⅰ	2-12
(6) 検証授業Ⅱ	2-15
(7) 質問紙調査の結果と生徒の変容	2-19
(8) エピソード評価	2-19
IX 研究の成果と今後の課題	2-20

参考・引用文献

I 研究主題

話す意欲を高め、積極的に話合いに参加する生徒の育成
～傾聴の「トレーニング」と「自己評価」を取り入れた指導過程の工夫を通して～

II 主題設定の理由

学校教育において話合いは、各教科、道徳科、特別活動、総合的な学習の時間等、様々な場面で実施される教育活動である。生徒は話合いを通して、自分と異なる考えや立場にある他者を尊重し、認め合うこと、支え合うことを学んでいく。中学校学習指導要領解説総則編においても、生徒が今後の未来の創り手として、「多様な他者と協働して課題を解決していくこと」や、「互いの考えを伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」を重視することが求められている。しかし、「中学生の発達段階として、個人差はあるものの、自己開示に慎重になったり、相手の発言に対して意見を言うことを躊躇したりしがちな面」が見られることは、中学校学習指導要領解説特別活動編においても指摘されている。また、宮崎県人権教育基本資料において、「人には、自分の気持ちや考え、意見、希望を率直に表現することができない場合がある」と示されているように、自身の思いや考えを伝えることに苦手意識をもつ生徒がいるという認識をもって、生徒の支援の在り方を考えることは重要であると考えた。

私自身、これまでの教職経験において、生徒の沈黙が続き、話合いが活性化しないといった状況を経験し、その打開策をなかなか見出せずにいる。現在の所属校においても、話合いにおける他者とのコミュニケーションに苦手意識をもち、積極的に話合いに取り組もうとしない生徒も見受けられる。また、話合いに関する意識調査（第3学年30名）では、「あなたの学級の話合いは意見が言いやすい雰囲気だと思いますか」という質問に対して、約6割の生徒が否定的な回答を示した。以上のことから、生徒が話合いにおいて安心して話をし、自分の思いや考えを伝えることができるようにするためには、何らかの手立てが必要であり、また、こうした手立てを提示することによって、話合いにおいて自分の思いや考えを伝えることに困難を感じている生徒への支援につなげることができるのではないかと考えた。

古宮(2015)は、「私たちが自分の思いを誰かに話し、それが十分に傾聴されると、『自分のことを自分の身になって理解してくれている。ありのままの自分が無条件に受け入れられている』と少しずつ実感できる。そんな人間関係の中で、私たちは自分を安心して表現できるし、もっと話したくなる」(p. 125)と主張している。このことから、話合いにおいて、互いの思いや考えを伝えやすくするためには、「話し手から聴き手」といったコミュニケーションの方向性から、「自分がしっかりと聴くことで、相手の話す意欲を高める」という、聴くことを重視したコミュニケーションを図る意識への転換が必要ではないかと考えた。

そこで、相手の気持ちを理解し、受け止めながら話を聴く傾聴を土台とし、生徒が他の人を思いやることを学ぶ教育活動である「ピア・サポート」に着目した。「ピア・サポート」においては、「FELOR(フェロー)」と呼ばれる「話の聴き方のポイント」が原則として具体的に提示されており、その習得を目的とした「トレーニング」が学習活動として実践化されている。また、傾聴は、ピア・サポートにおいて、「悩んだり、困っている仲間を支援する」際の基本となるスキルであり、全体で約20時間程度あるピア・サポートのためのスキル学習の一部となっている。本研究では、このスキル学習の中から、傾聴のための「トレーニング」と、ペアやグループでの話合いごとに傾聴に関する「自己評価」を実施する。このように、「トレーニング」と「自己評価」を指導過程に取り入れることで、生徒が傾聴を実践しながら話合いを進め、それぞれの思いや考えを伝え合い、積極的に話合いに参加することができるようになるのではないかと考えた。また、中学校学習指導要領解説特別活動編において、「特別活動は多様な他者との様々な集団活動を行うことを基本とし、そこでの『話合い』を全ての活動において重視してきた」と示されているように、本研究では、特別活動の構成要素である学級活動における話合いを授業実践の場としていく。

以上の理由から、本研究では、生徒が傾聴のための「トレーニング」と、話合いにおいて実践した傾聴に対する「自己評価」に取り組むことで、話す意欲を高め、積極的に話合いに参加する生徒の育成を図ることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

Ⅲ 研究目標

生徒の話す意欲を向上させ、積極的に話合いに参加するために、指導過程に傾聴の「トレーニング」と傾聴に対する「自己評価」を取り入れた学級活動における話合いの在り方について究明する。

Ⅳ 研究仮説

学級活動において、指導過程に傾聴の「トレーニング」と傾聴に対する「自己評価」を取り入れて話合いを実践すれば、生徒は聴き手に自分の話を聴いてもらっていると実感し、話す意欲が向上し、積極的に話合いに参加する態度を身に付けることができるであろう。

Ⅴ 研究内容

1 理論研究

- (1) 学習指導要領における話合いの位置づけ (2) ピア・サポートの精神を生かした話合い
(3) 話合いにおける傾聴の意義

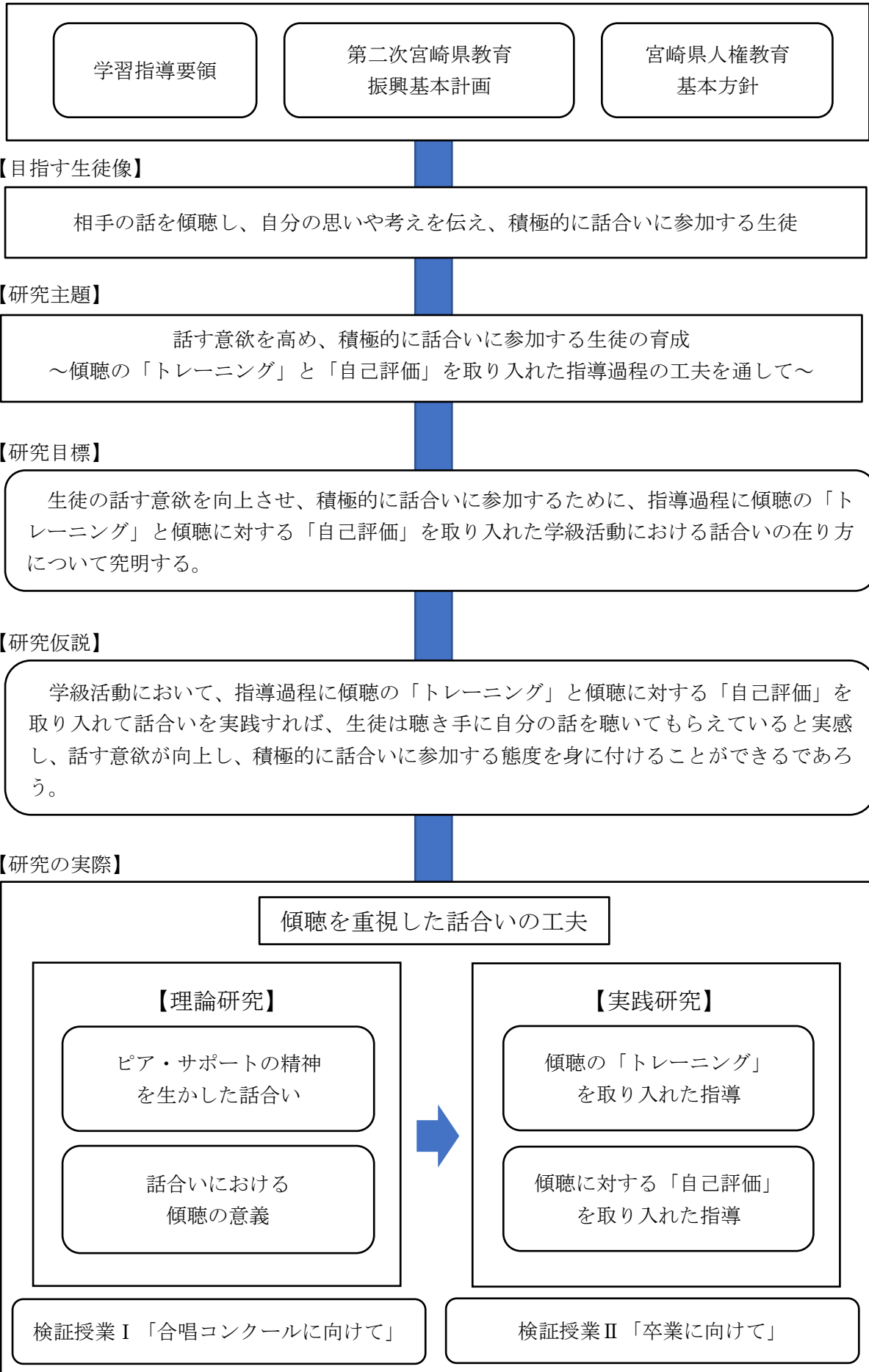
2 実践研究

- (1) 話合いにおける生徒の実態把握 (2) 傾聴を重視した話合いの手立て
(3) 傾聴を重視した話合いのモデルと指導過程 (4) 検証授業に向けて
(5) 検証授業Ⅰ (6) 検証授業Ⅱ
(7) 質問紙調査の結果と生徒の変容 (8) エピソード評価

Ⅵ 研究計画

月	研究の内容	研究事項	研究方法
4	○研究の方向性	○研究主題・副題・仮説等の設定 ○参考文献・先行研究収集	○文献研究
5	○研究の方向性 ○理論研究	○研究内容・研究計画設定 ○参考文献・先行研究収集	○文献研究
6	○理論研究 ○前期協議会の準備 ○前期協議会	○理論の構築 ○事前調査（アンケート作成） ○前期協議会に向けた資料作成	○文献研究 ○アンケート調査
7	○検証授業Ⅰの構想	○前期協議会のまとめ ○前期協議会を受けて理論の修正	○文献研究
8	○検証授業Ⅰの構想	○検証授業Ⅰの学習指導案作成及び内容の検討	○文献研究
9	○検証授業Ⅰの実施	○検証授業Ⅰの実施とその分析	○アンケート調査
10	○検証授業Ⅱの構想	○検証授業Ⅱの学習指導案作成及び内容の検討	○文献研究
11	○検証授業Ⅱの実施 ○後期協議会の準備	○検証授業Ⅱの実施とその分析 ○後期協議会に向けた資料作成	○アンケート調査 ○文献研究
12	○後期協議会	○後期協議会のまとめ	○文献研究
1	○研究のまとめ	○研究報告書作成	
2	○主題研究発表会の準備	○パネル作成	
3	○主題研究発表会	○主題研究発表会に向けた資料作成	

Ⅶ 研究構想



Ⅷ 研究の実際

1 理論研究

(1) 学習指導要領における話合いの位置づけ

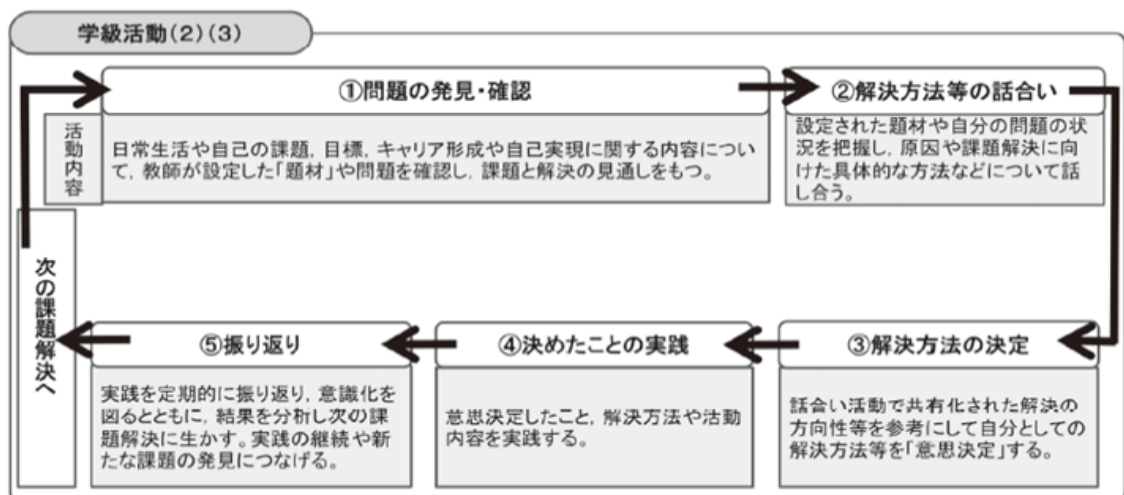
ア 学級活動における話合いの意義

主題設定の理由においても述べたように、本研究における話合いの検証は、特別活動の構成要素の一つである「学級活動」において実践する。また、学級活動における話合いの目標については、中学校学習指導要領解説特別活動編「学級活動の目標」の中で、次のように示されている。

学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

以上のように、学級活動においては、学級や学校における生活をよりよくするための諸問題を見付け、解決方法等について話合うことが求められている。そして、話合いの内容を全体で共有しながら解決方法の決定を行う。このようにして、全体場で決めたことを生徒それぞれが学校生活の場において実践し、定期的な振り返りを行いながら、次の課題解決につなげていく【図1】(文部科学省, 2018, p. 44)。こうした学習過程を通して、生徒は、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深めながら、自己実現を図ろうとする態度を養うことが特別活動の目標の一つとなっている。

【図1】学級活動における学習過程(例)



【図1】において示されているように、学級活動においては、①「問題の発見・確認⇒②「解決方法等の話合い」⇒③「解決方法の決定」⇒④「決めたことの実践」⇒⑤「振り返り」という流れで学習が進められる。

本研究においては、このうち、②「解決方法等の話合い」の段階を、本時の活動における話合いとして実施する。また、「学級・学校文化を創る特別活動中学校編(文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2014, pp. 9-10)」では、本時の活動において

話し合いを実施する際の手法として、パネルディスカッションによって集団思考を深めたり、小グループによって多様な意見を引き出したりといった事例が示されている。本研究においては、このうちの「小グループ」による話し合いをモデルとして、2人組のペア及び4人組のグループでの話し合いを実践する。

イ 学習指導要領との関連

中学校学習指導要領解説総則編においては、「生徒の言語活動は、生徒を取り巻く言語環境によって影響を受けることが大きいので、学校生活全体における言語環境を望ましい状態に整えておくことが大切である。」(文部科学省, 2018, p. 82)と指摘されており、以下の点に留意することが必要であると示されている。

生徒が集団の中で安心して話ができるような教師と生徒、生徒相互の好ましい人間関係を築くことなどに留意する必要がある。(下線筆者)

生徒は、話し合いにおいて、言語を通じてお互いの思いや考えを伝え合うことが求められる。したがって、上記に示されているように、話し合いにおける言語環境を、生徒が安心して話ができるよう配慮することは、話し合いを実践する上で重要な要素となる。

本県においては、生徒同士が思いやりの気持ちを育みながら、互いに助け合い、支え合う人間関係について学ぶ教育活動として、「ピア・サポート(Peer Support)」の実践が推進されている。そこで、本研究では、仲間(Peer:ピア)同士が「互いに支え合い、助け合う」ピア・サポートの精神を、生徒相互の好ましい人間関係の構築のために生かすことができないかと考えた。以上の理由から、まずは、次項よりピア・サポートとその土台となる傾聴との関係について考察する。さらに、どのようにして実際の授業の中に傾聴を取り入れるかについて詳述していく。

(2) ピア・サポートの精神を生かした話し合い

ア ピア・サポートの特徴

ピア・サポートには、次のような特徴(森川, 2002, pp. 24-28)がある。

- ① 生徒たちが他の人を思いやることを学ぶための一つの方法である。
- ② ピア・サポートを行うには、コミュニケーション能力が必要である。
- ③ 生徒たちが「耳を傾けること」、「支援すること」、「友達として思いやりを示すこと」ができるように訓練する必要がある。
- ④ ピア・サポートとは、子どもたちが他の生徒を助ける人的資源となれるよう支援することである。
- ⑤ 支援を受ける側の自助(セルフ・ヘルプ)を基本とする。

このように、ピア・サポートにおいては、生徒が互いに思いやり、助け合い、支え合うことが重要であり、生徒が自身のコミュニケーション能力を発揮しながら、お互いの気持ちを理解し、支えようとする活動の実践が求められる。また、こうしたピア・サポートの精神を実践するためには、次頁に示す「FELOR(フェロー)」の原則に基づく積極的な傾聴(アクティブ・リスニング)が重要な要素となる。

ピア・サポートの最も大切なことは、コミュニケーションを通して、相手の考えや気持ちを理解し、相手が自分で問題解決をするのを側面から援助することで、相手に代わって問題解決していくことではありません。そのための基礎として、**FELORの原則による積極的な傾聴（アクティブ・リスニング）を身に付け、相手との信頼関係を築くこと**が、サポート活動の重要なポイントとなります。（下線筆者）

FELORとは、①「Facing」、②「Eye-Contact」、③「Leaning Listen」、④「Open」、⑤「Relax」の略称であり、ピア・サポートにおいて、仲間の話を聴く上での指針となっている【表1】（岡田, 2013, pp. 64-65）。

【表1】「FELOR（フェロー）」による積極的な傾聴

項目	行動	ポイント・意義
Facing	相手の顔や表情をしっかりと見る。	「きちんと向き合うこと」が相手に信頼感や安心感を与える。
Eye-Contact	相手の目線を穏やかに見守る。	「あなたのことが気にかかっている」という気持ちを目で伝える。
Leaning Listen	相手の話を一生懸命に聴いていることを示す。	うなづき（「うん、うん」）やあいづち（「そうなんだ」）をしながら聴く。
Open	胸を開き、心を開いた姿勢をとる。	「何でもOKだよ」という気持ちが伝わる。
Relax	リラックスした気持ちで聴く。	「あなたのことを一緒に考えていこう」という気持ちが伝わる。

このように、ピア・サポートにおいては、仲間（ピア）の話に耳を傾け、気持ちを理解する傾聴の実践が重要となる。生徒は、傾聴を通して、悩んだり、困ったりしている仲間（ピア）の声を聴き、相手の気持ちに寄り添いながら支援を行っていくことが求められる。その結果として、生徒同士、互いに助け合い、支え合う人間関係を築くことができるとされている。

イ ピア・サポートにおける傾聴

傾聴がピア・サポートの重要な要素と考えられるのは、以下に示されている、ピア・サポートの特徴（森川, 2002, p. 27）が一つの論拠と考えられる。

ピア・サポートとは、子どもたちが悩みを抱えたり、困ったとき、**自分の友達に相談する**ことが最も多いという事実に基づいている。（下線筆者）

ピア・サポートにおいては、悩みや困り事がある生徒が、友人のところに相談に来た時点で、「サポーター」と「相談者」という関係が成立し、サポーターが相談者の悩みを聴きながら気持ちに寄り添い、支援につなげることが求められる。つまり、悩みをもっている生徒は、自分の思いや考えを聴いてくれる存在を友人に求めているということであり、自分の気持ちを理解し、分かってほしいという願いをもって友人のところにやってくると考えられる。その際、サポートをする側に求められるのは、話を真剣に聴き、その気持ちを理解しようと努めることである。このように、相談者の支えとなるように相手の話に真剣に耳を傾ける行為が、ピア・サポートにおける傾聴であり、ピア・サポートを実践する上で重要な要素となっている。

ウ 話し手の気持ちを理解する傾聴

ピア・サポートにおいては、相談者の「自助（セルフ・ヘルプ）」が基本となっており、相手の悩みをサポーターが「解決する」ことが目的ではない。大切なことは、相談者が自分で悩みを解決できるように支援することであり、その手段として傾聴のスキルが用いられる。人は皆、心のどこかで「本当に言いたいこと、分かってほしいこと」をもっており、傾聴を通じて、「自分にはこんな思いがあったのか」、「これが本当の自分の気持ちだったのか」と気付くことが、相手が自分の力で問題を解決する手がかりになるとされている。したがって、傾聴においては、相談者の言葉から得られる情報のうち、特にその「気持ち」を読み取ることが重要となる。単に相手が言った情報（事実）だけでなく、相手の気持ちを読み取ることによって、相談者が自分自身の気持ちに気付き、自分の力で問題の解決を図ろうとする意欲を高めることが大切だとされている。

サポーターが、傾聴を通じて相談者の思いや考えを聴く機会とは、実は、相談者が語る機会でもある。そして、サポーターと相談者とのより良いコミュニケーションによって、相談者は自分の思いや考えが引き出されていく。

エ 傾聴を取り入れた話合い

(1)-アにおいても述べたように、話合いにおいては、生徒同士が「仲間（ピア）の声に耳を傾け」、問題の解決に取り組んでいく。そして、題材に対する自分の思いや考え、悩みや困っていることなどをお互いに伝え合い、相互理解を深めていく。言い換えるならば、こうした活動は、前項において述べた「サポーター」と「相談者」との間で行われる相談活動であり、話合いを「仲間（ピア）の声に耳を傾け、相手の気持ちを理解する場」と捉えるならば、「ピア・サポートの精神を生かした話合い」として実践することが可能だといえる。したがって、傾聴を取り入れた話合いとは、ピア・サポートの精神である、仲間（ピア）のことを思いやり、支え合う気持ちを体現する場になると考えられる。

(3) 話合いにおける傾聴の意義

話合いとは、話し手と聴き手が、それぞれの役割を実践しながら、お互いの思いや考え、悩みや困っていることなどを伝え合い、相談し合う場である。つまり、生徒は話合いにおいて、「聴くこと」・「話すこと」に関わる能力を生かしながら、相手のことを思いやり、支え合うピア・サポートの精神を発揮することが求められる。

「宮崎県人権教育基本資料」【表2】（宮崎県教育委員会, 2011, p. 10）においては、お互いの思いや考えを伝え合い分かり合うためには、「聴くこと」と「話すこと」に関わる、それぞ

れのコミュニケーション能力が必要であり、充実した「話し合い」を行うためには、どちらも重要な要素であることが示されている。

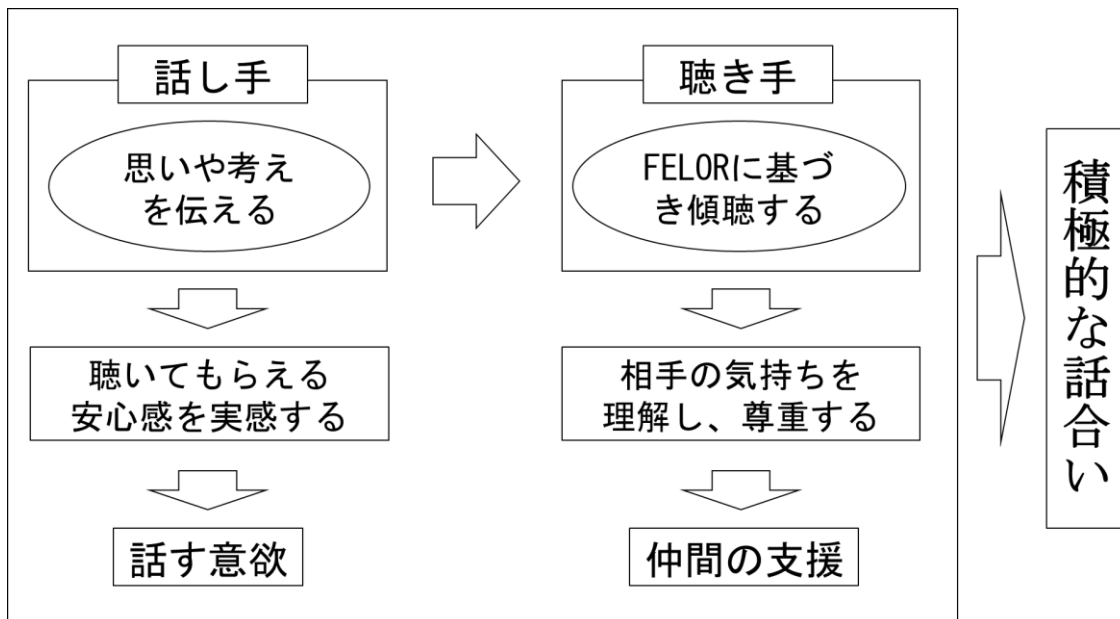
【表2】伝え合い分かり合うためのコミュニケーション能力

聴くこと	相手の立場や考えを尊重しながら話を聴くこと。
話すこと	自分も相手も大切にしたい自己表現ができること。

本来、コミュニケーションは、【表2】にあるように、聴き手と話し手との間で行われるものであり、「聴くこと」も「話すこと」も、どちらが欠けても話し合いを成立させることはできない。しかし、杉山(2015)が、「話すという行為は、聴く人に言葉を届けることであり、相手が聴いてくれて初めて話す行為が成り立つ」(p. 123)と指摘しているように、聴き手の聴く行為があつて初めて、話し手は自分の思いや考えを伝えようという気持ちをもつことができる。したがって、吉田(2013)が主張するように、「人に話を聴いてもらえないと感じている子供は、自分も相手の話を聴かないという態度を取りやすく」、「自分の気持ちを伝えられる子供は、人の話も聴ける」(p. 15)と考えられる。つまり、相手の伝えようとしている思いを、相手の身になって理解しようと真剣に耳を傾けることで、話し手は「自分の話を聴いてくれている」という安心感を得ることができる。その意味において、「聴くこと」は、話し手の「話す」行為を促し、安心して「話す」環境をつくることにつながるといえる。

このように、聴き手が傾聴を実践することで、話し手は自分の思いや考えが伝えやすくなり、「話すきっかけ」や「話そうという気持ち」、「話したいという意欲」等、「話すこと」に関わる様々な意欲を高めることができると考えられる。また、話し合いが進む中で、聴き手と話し手の役割が交代し、傾聴を実践しながらコミュニケーションを継続させることで、話し合いに対する生徒の積極的な参加が期待できると考えられる【図2】。

【図2】傾聴を重視した話し合い



2 実践研究

(1) 話し合いにおける生徒の実態把握

本研究を進めるにあたって、まず、研究対象となる学級の話合いの状況を把握するために、学級担任へ事前の口頭調査を行った。その結果、「話し合いにおける学級の雰囲気は活発ではなく、意見交換が十分に行われていない」といった状況があることが確認された。そこで、生徒に自由記述式のアンケート調査を実施し、学級の話合いに関して実態調査を行った。

アンケートの質問項目「グループで話し合いを行う上であなたが困っていることは何ですか」に対して、主に以下のような回答【表3】が挙げられた。

【表3】話し合いで困っていること

積極的に意見が出せない。
関係ない話をして、話し合いに参加していない人がいる。
仲のよい人がいないと、あまり活発な話し合いにならない。

以上の結果から、学級担任の回答と同様の実態があり、生徒が自分の思いや考えを伝え、積極的に話し合いに参加するための手立てが必要であるといえる。

(2) 傾聴を重視した話し合いの手立て

理論研究において詳述したように、本研究においては、仲間の声を「ピアの声」と捉え、その声に耳を傾け、相手の気持ちを理解する話し合いを、ピア・サポートの精神に基づく傾聴を重視した話し合いとして実践する。また、その手立てとして、本時の導入時に、傾聴のトレーニングを実施し、その後続くペア及びグループでの話し合いにおいて、傾聴を意識させながら話し合いに取り組ませる。また、話し合いの後には自己評価を行わせ、互いの傾聴について振り返る時間を設定し、傾聴への意識を高めながら話し合いに取り組ませる。

ア 傾聴のトレーニング

主題設定の理由でも述べたように、ピア・サポートにおいては、コミュニケーション能力（スキル）が重要な要素であり、そのスキル育成のために、構成的グループエンカウンター等を取り入れたトレーニングを実施することが求められる。

本研究においては、傾聴に関わるスキルとして、「相手の話を聴くこと」及び「相手の気持ちを理解すること」をねらいとした、「ひたすらジャンケン」・「あいこでジャンケン」・「気持ちものさし」の3つのトレーニング【表4】を学習過程の「導入」段階において実施する。

【表4】傾聴に関わるトレーニング

活動名	ねらい
ひたすらジャンケン	勝った人の気持ち、負けた人の気持ちを体験する。
あいこでジャンケン	ジャンケンを通して、人の気持ちに気付く。勝ち負けでなく、あいこになったときの気持ちを振り返る。
気持ちものさし	互いの感情を数値化し、客観的にとらえる。

イ 自己評価による振り返り

傾聴を重視した話し合いにおいて、「FELOR（フェロー）」を意識し、実践することは大変重要である。したがって、話し合いの前には必ず、どのような点に留意して傾聴を行うかを確認し【表5】（岡田, 2013, pp. 64-65）、話し合い後には、FELORに基づいて自分自身の傾聴について自己評価させる。そして、ペア及びグループ内で、お互いの傾聴について良かった点や不十分だった点等について意見交換させる。こうした振り返りの時間を話し合いの後に確保し、傾聴への意識を高めさせる。

【表5】FELORのチェックポイント

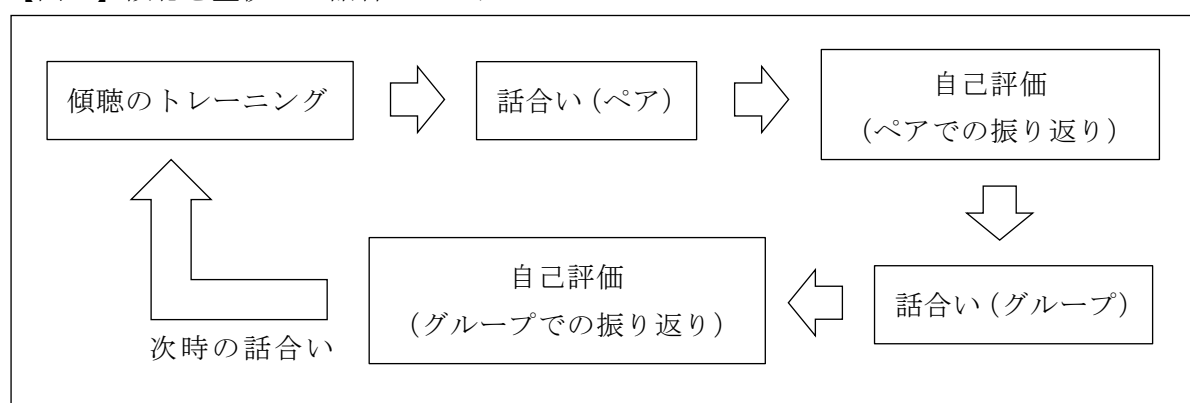
項目	チェックポイント
Facing	相手の顔や表情をしっかりと見れているか。
Eye-Contact	相手の目線を穏やかに見守れているか。
Leaning Listen	相手の話を一生懸命に聴いていることを示しているか。
Open	胸を開き、心を開いた姿勢がとれているか。
Relax	リラックスした気持ちで聴いているか。

(3) 傾聴を重視した話し合いのモデルと指導過程

ア 話し合いのモデル

傾聴を重視した話し合いにおいては、「トレーニング」⇒「話し合い（ペア）」⇒「自己評価（ペアでの振り返り）」⇒「話し合い（グループ）」⇒「自己評価（グループでの振り返り）」の流れを話し合いの基本モデルとして実施する【図3】。

【図3】傾聴を重視した話し合いのモデル



話し合いは、以上の流れで実施する。また、教師の話や生徒の発表といった場面においても傾聴を実施するよう指導する。

イ 話し合いの指導過程

本研究においては、図3のモデルを指導過程に取り入れることにより、傾聴を重視した話し合いの実践を試みる【表6】。また、この指導過程は、①「傾聴のトレーニング」、②「話し合い（ペア及びグループ）」、③「自己評価（ペア及びグループでの振り返り）」、④「シェアリング（意見の共有）」の4つの段階に分けている。導入時に傾聴を意識づけ、そのため

のトレーニングを行い、その後続く話合いの中で学習した傾聴を実践する。また、話合いの後には実践した傾聴に対する自己評価と振り返りを行う。さらに、まとめの段階において、シェアリング（意見の共有）の時間を設定する。これは、傾聴の段階をペアからグループ、全体へと上げていき、学級において一人の発言者に注目しなければならない状況をつくることで、授業全体にわたってFELORを意識し、傾聴を実践させるための手立てである。

【表6】傾聴を重視した話合いの指導過程

段階	指導過程	活動内容
導入	傾聴のトレーニング	<ul style="list-style-type: none"> ・FELORを確認し、傾聴を実践する。 ・相手の気持ちを理解するトレーニングを行う。
展開	話合い（ペア）	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアで話合いをする。 ・傾聴を実践し、相手の気持ちを理解する。
	自己評価 （ペアでの振り返り）	<ul style="list-style-type: none"> ・FELORに基づいて自己評価し、ペアでお互いの傾聴について振り返る。
	話合い（グループ）	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで話合いをする。 ・傾聴を実践し、相手の気持ちを理解する。
	自己評価 （グループでの振り返り）	<ul style="list-style-type: none"> ・FELORに基づいて自己評価し、グループでお互いの傾聴について振り返る。
まとめ	シェアリング （意見の共有）	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで意見交換した内容を、学級全体に伝え、共有する。全体の場においても、しっかりと発表者（発言者）の話を傾聴する。

以上のように、全ての指導過程において傾聴の実践を試みる。傾聴を重視した話合いのモデルを学級活動1単位時間の中に位置づけることにより、生徒が繰り返し傾聴に取り組み、傾聴に関するスキルを身に付けることができるようにする。

(4) 検証授業に向けて

ア ピア・サポートの精神を生かす題材の選択

話合いの題材選択にあたっては、生徒が課題の解決にあたって、ピア・サポートの精神を発揮しやすいものにしたと考え、全国の学校で実施されている「ピア・サポートの活動事例」【表7】（森川, 2002, pp. 34-35）を参考に検討した。

【表7】ピア・サポートの活動事例

困っている人への支援	落ち込んでいる人、心配事のある人等への働きかけを行う活動。
グループのリーダーとして働く	学級や学校の行事に積極的に参加し、みんなのために役立つ活動。
相談活動	困っている人や、悩んでいる人の相談に応じる活動。

ピア・サポートに取り組むためには、「生徒の実態と課題の把握」、「ピア・サポート活動の理解と必要性の理解」、「自校にあったピア・サポート活動の全体構想をつくる」（森川, 2001, p. 31）といった過程を踏むことが重要である。

本研究においては、話し合いを「困っている人への働きかけ」として実施し、「学級や学校の行事に積極的に参加し、みんなのために役立つ」ために、「困っている人の相談に応じる」活動として、「合唱コンクールに向けて」及び「卒業に向けて」の2つを話し合いの題材として決定した。

イ 事前授業における傾聴の指導

今回、検証授業における事前授業として、傾聴について以下のような指導を実施した。まず、傾聴とは何かについて、【図4】の傾聴のポイントを示しながら、「人は皆、心のどこかで、『本当に言いたいこと』、『分かってほしいこと』をもっていること」、また、傾聴によって、相談者がそうした事柄に気付くことが、問題や悩みを解決する手がかりとなることについて解説した。また、「ここちいい話の聴き方」ワークシート（岡田, 2013, 64 頁）【図5】を使用し、FELORについて指導した。

【図4】傾聴のポイント

- ① 人は情報に気持ちに乗せて話をする。（話＝情報＋気持ち）
- ② 相手の気持ちを理解するように話を聴くこと。相手の気持ちが分かったら、自分の言葉で返してあげることで、相手は「あ～、自分の気持ちを分かってもらえた」と実感することができる。
- ③ 自分の力で問題を解決するためには、傾聴によって「これが自分の本当の気持ちだったのか」と気付くことが重要である。

【図5】ここちいい話の聴き方

ここちいい話の聴き方
 ここちいい話の聴き方を心がけて、信頼できる人になろう!!
 友達の話をちゃんと聴くために、やさしく声をかけてあげられるために
心がけたいF.E.L.O.R

F。フェイスング (Facing) 相手の顔や表情をしっかりと見る!
 手を伸ばすと相手に触れるぐらいの場合で「あなたと一緒にいたい」という意思を伝えます。

E。アイコンタクト (Eye-Contact) 相手の目線を穏やかに見守る!
 「私はあなたのことがとても気になっています」という心を目で伝えます。じろじろ見るのも目をそらすのでもありません。温かいまなざしをこころがけます。

L。リーニング・リスン (Leaning Listen) 「相手の話を一生懸命聴いている」ことを示す
 「あなたに関心があります」という意味で、うなずき「うん、うん」あいづち「そうなんだね」が大切です。

O。オープン (Open) 腕を曲げ心を開いた姿勢をとる!
 「相手をオープンに受け入れている」ことを相手に示すこととなります。「何でもOKだよ!」の姿勢で聴くことが大切です。(オープンマインドが大切です。)

R。リラックス (Relax) リラックスした姿勢で聴く!
 「あなたのことと一緒に考えていこう」という心のパワーがあることを相手に伝えることとなります。かたい姿勢では聴けません。

(5) 検証授業 I (学級活動「合唱コンクールに向けて」)

検証授業 I では、「合唱コンクールに向けて」の題材で話し合いを実施した。本授業における、傾聴を重視した話し合いのための具体的な手立ては以下の3点である。

- ① 「ここちいい話の聴き方」のワークシートでFELORを確認し、傾聴を実践する。
- ② 相手の気持ちを理解するトレーニングとして、「ひたすらジャンケン」と「気持ちも のさし」を実施する。
- ③ 互いの傾聴について振り返る時間を設定し、傾聴への意識を高める。








このように、傾聴のためのトレーニングや振り返りの時間を取り入れることで、傾聴への意識を高め、話し合いや意見交換の時間をできるだけ多く設定した。

ア 学習指導過程

【題材】「合唱コンクールに向けて」

【本時のねらい】 傾聴によって相手の気持ちを理解し、仲間との意見交換を行う。

【学習指導要領との関連】 中学校学習指導要領第5章特別活動の第2の〔学級活動〕の2「内容」(2)ーア「自他の個性の理解と尊重、よりよい人間関係の形成」

段階	活動内容	ねらい及び傾聴に関する留意点
導入	【①ウォームアップ】 『ひたすらジャンケン』 ・教室を歩きながら、出会った人とジャンケンを行う。1分間で、できるだけ多くの人とジャンケンをする。	 【ねらい】 ・勝った人の気持ち、負けた人の気持ちを体験する。 【傾聴に関する留意点】 ・FELORについて確認し、実践する。
	【②トレーニング】 『気持ちものさし』 ・「今日の気分」を点数に置き換える。10点を満点として、お互いに自分の点数や、その理由について伝え合う。	 【ねらい】 ・お互いの感情を数値化し、客観的に理解する。 【傾聴に関する留意点】 ・「相手の気持ち」を理解するように努める。
展開	【③話し合い準備(ペア)】 『話し合いの準備』 ・合唱コンクールに取り組む上での問題点や妨げになる点、課題等についてペアで確認する。	 【ねらい】 ・話し合いに向けて準備する。 【傾聴に関する留意点】 ・FELORを確認・実践しながら、相手の話を聴く。
	【④話し合い(ペア)】 『合唱コンクールに向けて』 ・合唱コンクールに対する考え方や目標、悩みや困っていることなどについて伝え合い、互いの話を傾聴する。	 【ねらい】 ・お互いの気持ちを理解しながら、考えを共有する。 【傾聴に関する留意点】 ・相手の気持ちを理解し、寄り添うことを意識する。
	【⑤振り返り(ペア)】 『話し合いの振り返り』 ・自身の傾聴を振り返り、感想や反省を伝え合う。 ・グループでの話し合いに向け、お互いにアドバイスする。	 【ねらい】 ・傾聴が実践できたか振り返り、次の活動につなげる。 【傾聴に関する留意点】 ・FELORを実践することができたかお互いに確認し合う。
	【⑥話し合い(グループ)】 『グループでの意見交換』 ・歌いたくないから合唱コンクールの練習はしないと主張する仲間がいたらどうするかについて、お互いに意見交換する。	 【ねらい】 ・人数が増えても、傾聴を実践し、話し合いを進める。 【傾聴に関する留意点】 ・班の中で一番右上の人から話す。他のメンバーは、FELORを意識して、傾聴を実践する。
まとめ	【⑦シェアリング(意見の共有)】 『全体での意見交換』 ・意見交換の内容を各グループの代表者が学級全体に伝える。	 【ねらい】 ・全体活動において、話し手が一人の場合でも傾聴を実践する。 【傾聴に関する留意点】 ・FELORを確認し、実践しながら相手の話を聴く。

イ 授業の考察

(7) FELORを意識した傾聴について

導入や展開の前半までは、ワークシートを確認しながら傾聴を実践する様子が見られた。しかし、時間が経つにつれて、傾聴が惰性的になっている状況が確認されたため、活動の途中で何度か、「FELORを意識すること」、「傾聴をしっかりと実践すること」等について助言を行った。以下に、授業後に実施したアンケート（生徒数 29 人）について示す。

① FELORを実践することができましたか？

・とてもそう思う	18 人
・少しそう思う	9 人
・あまりそう思わない	1 人
・そう思わない	1 人

② 相手の気持ちを理解しようとして傾聴を心がけましたか？

・とてもそう思う	26 人
・少しそう思う	3 人
・あまりそう思わない	0 人
・そう思わない	0 人

生徒アンケートの結果から、6 割の生徒が FELOR を実践し、8 割以上の生徒が傾聴を通じて相手の気持ちを理解しようとして心がけていることが分かる。しかし、「FELOR を実践することができましたか」という質問においては、29 人中 9 人の生徒が「少しそう思う」という回答を示しており、さらに「そう思わない」と否定的な回答をした生徒もいる状況であった。これは、学級の生徒全員が、確実に傾聴を身に付けている状態と比較するならば、まだ改善の余地があるといえる。

(4) 傾聴を重視した指導過程について

傾聴のトレーニングは、前時の事前授業の内容を振り返り、「傾聴をしっかりと意識して授業に臨むように」と伝えた直後の活動であったためか、生徒たちには、積極的に傾聴しようとする様子が見られた。生徒へのアンケート結果は以下のとおりになった。

③ トレーニングで相手とコミュニケーションを図ることができましたか？

・とてもそう思う	25 人
・少しそう思う	3 人
・あまりそう思わない	1 人
・そう思わない	0 人

④ 相手の気持ちを理解することができましたか？

・とてもそう思う	23 人
・少しそう思う	6 人
・あまりそう思わない	0 人
・そう思わない	0 人

活動自体は新鮮味もあったためか、意欲的に話合いに取り組む様子が見られた。③の結果からも、生徒のコミュニケーション活動は活発であったことが窺える。

今回、本時全体を、生徒が傾聴を意識し、身に付けることを主眼にした指導過程として実施した。傾聴のトレーニング「気持ちものさし」や、ペア及びグループでの自己評価と振り返りを 1 単位時間の中で実践することで、生徒にとっては、トレーニングの成果をすぐに生かす場となり、より実践的な傾聴活動が行えたのではないかと考えられる。しかし、④の結果に見られるように、相手の気持ちを理解することについては、全体の約 2 割ではあるが、「少しそう思う」という生徒もいることから、さらに一人でも多くの生徒が相手の気持ちに寄り添い、その気持ちを理解するよう傾聴に取り組むためには、何らかの手立てを取る必要があるといえる。

また、以下の生徒アンケートの結果が示すように、約7割の生徒は自分の思いや考えを伝え、合唱コンクールへの意欲が高まったと回答している。しかし一方で、他の3割の生徒については、自分の思いや考えを十分に伝えることができていない状況であることが窺える。

<p>⑤ 自分の思いや考えを伝えることができた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とてもそう思う 21人 ・少しそう思う 8人 ・あまりそう思わない 0人 ・そう思わない 0人 	<p>⑥ 合唱コンクールへの意欲が高まった</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とてもそう思う 25人 ・少しそう思う 3人 ・あまりそう思わない 1人 ・そう思わない 0人
--	--

(ウ) 検証授業Ⅰの課題

以上の結果から、検証授業Ⅰにおいて、次のような課題が明らかとなった。

- ① 話し合い以外の場面において、一部の生徒に教師の話に耳を傾けることができていない状況が見られた。ペアやグループ活動ではお互いの話を聞くことができていても、教師の話が聞けていないという状況は、傾聴が意識化されていないことを示している。
- ② 話し合いはできているが、その中で、最後まで傾聴を意識してお互いの話を聴いているとは言い難い。特に、グループでの話し合いにおいては、それぞれの意見を真剣に聴いていない状況が見られた。
- ③ 人間関係上、生徒のペアやグループ編成について考慮しなければならない状況が発生した。授業中の話し合いの様子や授業後に行ったアンケートの回答から判断し、検証授業Ⅱにおいては、ペア及びグループの組み方について配慮する必要がある。

上記のように、傾聴を身に付けることをねらいの一つとして実施した授業において、教師の話が聴くことができていない、また、グループでの話し合いにおいて互いの話を聴くことができていないという状況は、検証授業Ⅱに向けて改善すべき課題である。また、上記③のペアの編成については、研究の性格上、引き続き自然ペアでの実施を検討したが、学級担任と相談した結果、今回は生徒の心情を優先すべきであるとの見解で一致した。そこで、検証授業Ⅱにおけるペアの編成にあたっては、生徒へのアンケート及び人間関係等を考慮して、学級担任自らが行った。

(6) 検証授業Ⅱ（学級活動「卒業に向けて」）

検証授業Ⅱでは、「卒業に向けて」の題材で話し合いを行った。また、検証授業Ⅰで明らかとなった課題を受け、生徒がより一層、傾聴に取り組むための手立てとして、以下の2点を実施した。

- ① 「傾聴自己評価シート」を作成し、より具体的に傾聴に取り組ませながら、傾聴への意識を高め、実践させる。
- ② ペア、グループ、全体での傾聴活動ごとに目標を決め、反省を行う振り返りの時間を設定し、傾聴の取組について自己評価させる。

ア 傾聴自己評価シート

大竹(2015)によれば、「子どもの心に様々な感情が湧き上がり、気持ちがモヤモヤしたり、現状や自分の気持ちがとらえきれないとき、気持ちを整理するために『聴いてほしい』という気持ちになるとされる。さらに、「信頼できる相手に応援してほしいとき」・「一緒に考えて

ほしいとき」・「自分が経験した出来事や自分の感情を分かっしてほしいとき」にも、子ども達は「話したい」という願いをもつ(pp. 69-71)と指摘している。このことから、生徒が自ら話したいという気持ちをもつのは、次の4点の場合であると考えられる。

① 聴いてほしいとき	② 応援してほしいとき
③ 一緒に考えてほしいとき	④ 分かっしてほしいとき

本研究では、以上の4点をさらに、「話し手の願い」・「聴き手の対応」としてまとめ、ピア・サポートにおけるFELORを参考に、新たな傾聴の手立て【表8】として示した。

【表8】傾聴の手立て

No.	話し手の願い	聴き手の対応（手立て）
①	聴いてほしい	○個人で考える時間を確保する。 ○自分がしていることをやめる。 ○相手の方に体を向ける。 ○相手の話をさえぎらず、最後まで聴く。
②	応援してほしい	○振り返りを実施する。 ○人間関係に配慮してペアを組む。
③	一緒に考えてほしい	○ペア学習を実施する。 ○グループ学習を実施する。
④	分かっしてほしい	○相手の話を聴いて大きくうなづく。 ○相手の話に合わせて相づちを打つ。 ○相手の話の内容を繰り返す。 ○相手の言葉に集中する。 ○相手の言ったことを肯定的にとらえる。 ○相手の気持ちを理解する。

検証授業Ⅱにおいては、以上の手立てから「傾聴自己評価シート」【表9】を作成し、「傾聴ワークシート」【図6】と共に提示し、指導した。

【表9】傾聴自己評価シート

No.	傾聴評価項目	ペア	グループ	全体
		評価	評価	評価
1	自分がしていることをやめる			
2	相手の方に体を向ける			
3	心に相手の思いを入れる容器を準備する			
4	相手の話を聴いて大きくうなづく			
5	相手の話に合わせて相づちを打つ			
6	相手のキーになる言葉を繰り返す			
7	相手の気持ちを知らうとする			
8	相手の考えを自分の考えと混同しない			
9	相手の気持ちを言葉で伝える			
10	相手の話をさえぎらず、最後まで聴く			

4：とてもよくできた 3：どちらかといえばできた
2：どちらかといえばできなかった 1：全くできなかった

【図6】傾聴ワークシート



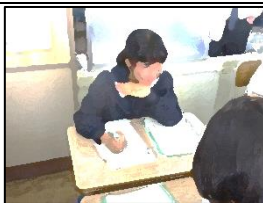



<p>1 聴く姿勢、雰囲気をつくる</p> <p>(1) <u>自分がしていることを止め</u>、相手に体をむき、相手の顔を見る。 (2) 心に余裕がある雰囲気。</p> <p>2 相手の言葉を受け取る準備をする</p> <p>自分の心の中に、<u>相手の思い</u>を入れる空間をつくる。 *ピア・サポートの実践では、相手の話をイメージしながら聴くことが大切です。 自分の思いを心の奥に置いて、相手の話を聴こうとすると、相手の思いが自分の思いに影響されずにそのまま入ってきて、より分かりやすく聴くことができます。 *次に自分が発する言葉を考えずに、話を聴いているときは、相手の話に集中しましょう。</p> <p>3 とにかく相手の話を最後まで聴く!</p> <p>話を途中で遮られたり、早くしると息がされたりすると、話す気がなくなってしまいます。相手の話を最後まで聴くことが、人間関係がうまくいくコツです。</p> <p>4 自分のことは話さない</p> <p>「聴き上手は、話さない!」が基本です。自分の話をすることで、相手の話を聴く時間を奪うことになってしまいます。常に相手の話を聴きましょう。</p> <p>5 相手の言ったことを肯定的にとらえる(相手の話や考えを否定しない)</p> <p>自分の話を否定的に聞かれていることがかると、話し手は話す気がなくなってしまいます。「相手の言ったことは、相手のこととして認める」という姿勢が大切です。 相手の話や考えを否定せず、「そうなんだね」「そうかもしれないね」と答えるようにしましょう。 *自分の気持ちで相手の話を聴かぬことが大切です。自分の立場を主張せず、相手の気持ちになって、相手と自分を混同しない。常に相手を理解しようとい心がけましょう。</p>
--

イ 学習指導過程

【題材】「卒業に向けて」

【指導のねらい】全ての活動において傾聴を実践し、自分の思いや考えを伝え合う。

【学習指導要領との関連】中学校学習指導要領第5章特別活動第2の〔学級活動〕の2「内容」(2)ーア「自他の個性の理解と尊重, よりよい人間関係の形成」

段階	活動内容	ねらい及び傾聴に関する留意点
導入	<p>【①トレーニング】</p> <p>『あいこでジャンケン』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4回勝った生徒は椅子に座り、負けた生徒は立ち続ける。また、その時の気持ちを述べ、3回あいこになったらお互いに座る。その後、違いについて意見交換する。 	<p>【ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンを通して、人の気持ちに気づく。勝ち負けではなく、あいこになったときの気持ちを振り返る。 <p>【傾聴に関する留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の気持ちを考えながら活動する。
展開	<p>【②話し合い(ペア)】</p> <p>『卒業に向けて』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業に向けて、これから努力すべきことについてお互いの思いや考えを伝える。 	<p>【ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しっかりと傾聴し、お互いの考えや気持ちを理解する。 <p>【傾聴に関する留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価項目を確認し、目標を決める。項目に従い、傾聴する。
	<p>【③振り返り(ペア)】</p> <p>『話し合いの振り返り』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価をし、お互いの傾聴について振り返る。 ・グループでの話し合いに向けて、互いにアドバイスする。 	<p>【ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・傾聴を振り返り、意識を高め、次の活動につなげる。 <p>【傾聴に関する留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価項目に従い、自己評価し、反省を記入する。
	<p>【④話し合い(グループ)】</p> <p>『卒業に向けて』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業式に向けて、学級のために自分自身ができることは何かについて話し合う。 	<p>【ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人数が増えても傾聴を行う。 <p>【傾聴に関する留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価項目を確認し、目標を決める。項目に従い、傾聴する。
	<p>【⑤振り返り(グループ)】</p> <p>『話し合いの振り返り』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己評価をし、お互いの傾聴について振り返る。 ・意見を一つにまとめ、発表者を決める。 	<p>【ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・傾聴を振り返り、意識を高め、次の活動につなげる。 <p>【傾聴に関する留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価項目に従い、自己評価し、反省を記入する。
まとめ	<p>【⑥シェアリング(意見の共有)】</p> <p>『全体での意見交換』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに意見を言う。全体の場では出された各班の意見について、各グループで意見交換する。 	<p>【ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの成果として、学級全体の場で傾聴を実践する。 <p>【傾聴に関する留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者に注目し、評価項目を意識して、傾聴を実践する。

ウ 授業の考察

(7) 自己評価シートを使用した傾聴について

生徒は、ペアやグループ、全体で話す際に、評価シートを何度も確認する様子が見られた。

自己評価については4段階で行わせたが、10個ある項目のうち最も評価が低かったのは、「相手のキーになる言葉を繰り返す」であった。これは、聴き手が話し手に対して、「あなたの話をしっかり聴いていますよ」ということを伝えることをねらいとするものであるが、生徒には実践が難しい活動であったようである。この点については、さらなる指導の工夫・改善が必要である。

(イ) 傾聴活動ごとに「目標」を決め、「反省」をする手立てについて

検証授業Ⅱでは、授業の最初から最後まで、全ての話を傾聴するよう指導した。活動によって、傾聴に対する意識が低下する場面も見られたが、検証授業Ⅰに比べて、生徒の傾聴に対する意識が高まっている様子が伺えた。生徒のアンケート（生徒数は29人）は以下のとおりである。

<p>① 全ての活動で傾聴を実践することができた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とてもそう思う 17人 ・少しそう思う 10人 ・そう思わない 1人 ・無回答 1人 	<p>② 相手の気持ちを理解することができた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とてもそう思う 25人 ・少しそう思う 2人 ・そう思わない 1人 ・無回答 1人
<p>③ 自分の思いや考えを伝えることができた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とてもそう思う 24人 ・少しそう思う 3人 ・そう思わない 1人 ・無回答 1人 	<p>④ 普段よりも話しやすかった</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とてもそう思う 22人 ・少しそう思う 5人 ・そう思わない 1人 ・無回答 1人

①のアンケート結果において、「全ての活動で傾聴を実践できた」と回答した生徒は、全体の約6割の生徒であった。従って、今後も引き続き傾聴のトレーニングを継続し、普段の学校生活においても傾聴を意識的に実践する必要があるといえる。また、②のアンケートでは、今回の手立てによって、全体の約9割の生徒が「相手の気持ちを理解することができた」と回答し、③のアンケート結果からは、約8割の生徒が「自分の思いや考えを伝えることができた」と回答していることが分かる。さらに、アンケート④では、約8割の生徒が、「普段よりも話しやすかった」と回答していることから、傾聴を重視した話合いにおいて、生徒が話しやすさを実感することができたといえる。

(ウ) 生徒の感想

検証授業Ⅰ・Ⅱの後で、「傾聴を重視した話合いを行うことで、どのような変化があったか」について、自由記述式のアンケートを実施した。以下に、抽出生徒の記述内容を示す。

【検証授業Ⅰ】

相手の話をよく聞いて、理解しようとする姿勢が自分にとって大切らしく感じた。自分の話を聞くときは傾聴したと思う。

【検証授業Ⅱ】

「話をやる」という単純な行動に対する意識や、話をやるぞ!という意欲が普段と比べて増した。

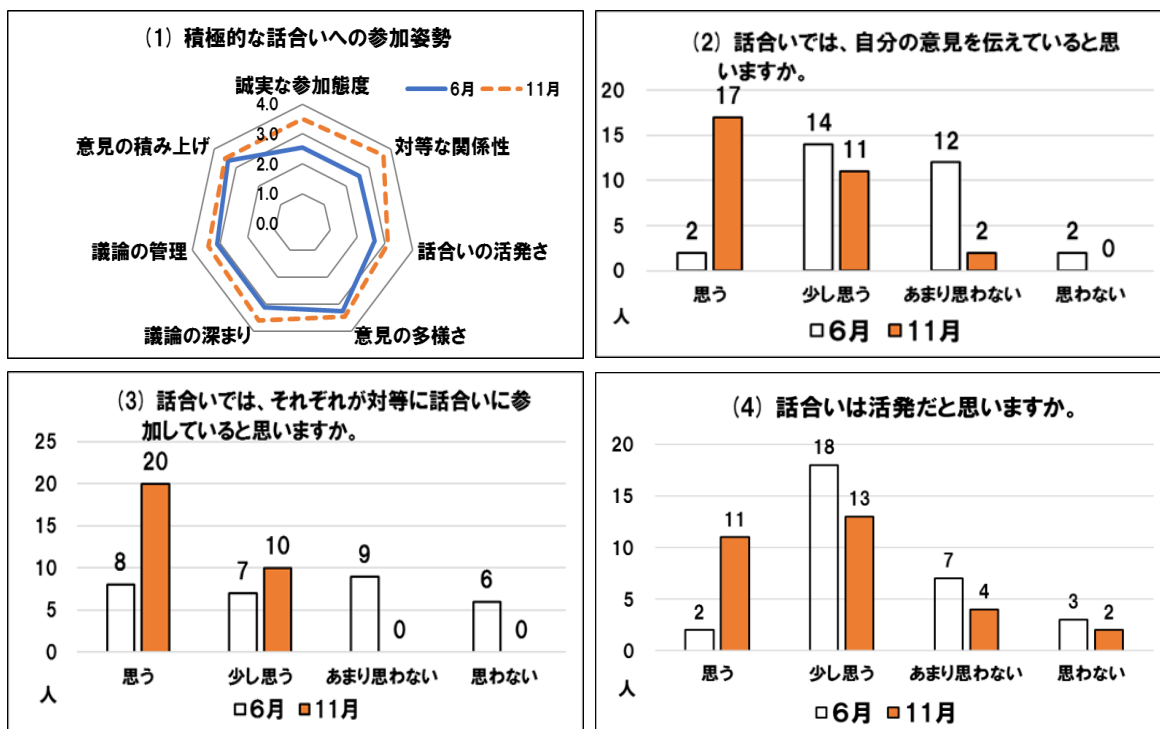
このように、「話す意欲が増した」と実感した生徒がいたことは、今回の研究における成果の一つといえる。検証授業後に行ったアンケートでは、「自分の思いや考えが伝えやすくなりましたか」という質問に対して、「そう思う」と回答した生徒は、検証授業Ⅰと検証授業Ⅱの前後で16人から25人に増加した。また、「少し思う」から「そう思う」に回答が変化した生徒は8人、「あまり思わない」から「少し思う」に変化した生徒は1人であった。従って、傾聴を重視した話合いの実践は、生徒が安心して自分の思いや考えを伝えるための手立てとして、ある程度有効であったといえる。

(7) 質問紙調査の結果と生徒の変容

【グラフ1】は、6月と11月に実施した本学級生徒の話合いに関する意識調査の結果である。

なお、本研究においては、1-(1)-アで述べたように、話合いを2人組のペア及び4人組のグループで行うものとして、生徒への調査を実施した。

【グラフ1】話合いの状況に関する質問紙調査の結果



グラフ1-(1)は、「自律型対話における7つの評価指標」(上山, 2015, p. 5)に基づいた4段階尺度法による質問紙調査の結果である。これは、積極的な話合いへの参加姿勢を測定する調査であり、①誠実な参加態度・②対等な関係性・③話合いの活発さ・④意見の多様さ・⑤議論の深まり・⑥議論の管理・⑦意見の積み上げの7つの要素から成っている。

本学級においては、全ての質問において、評定平均値が上昇している【上記グラフ(1)】。また、上記7つの要素のうち、①・②・③については、特に有意な上昇が見られた【上記グラフ(2), (3), (4)】。以上の結果から、本学級の話合いにおいては、傾聴を重視した話合いの実践が、生徒の話合いにおける積極性を高める要因になっているのではないかと推察される。また、以下の生徒の感想からは、話合いに傾聴を取り入れたことで、生徒が自分の思いや考えを伝えやすくなったことが推察される。

聴き方が変わるだけで、すく話せましたし、楽しく話すことができた。傾聴の大切さ、身をもって知ることもできて良かったです。

【授業全体を通しての感想・反省を書きましょう】
今日の授業で、目・耳・口で傾聴をすることで話していた人も話しやすいと言っていたし、聴いている自分も何か言葉では表わせられない良い気持ちになって、少し友人との輪が深まったかなと感じた。

(8) エピソード評価

検証授業後に、傾聴を重視した話合いが普段の学校生活にどのような影響を与えたかについて、自由記述式のアンケート調査を実施した。次頁に主な回答を示す。【表10】

【表 10】 検証授業後の自由記述アンケート

人が意見を言うときに、聴く姿勢が変わり、相づちなどが打てるようになった。
みんな意見をしっかりと聴くようになった。
自分から意見を言うことが増えた。
発表する人が少し増えた。
意見が合わなくても、友人同士で揉めることがなくなった。
今まで以上に様々な人と話す機会が増えた。
劇的に変わったわけではないけれど、お互いの言いたいことが言えるようになった。
クラスで発言する人の数が増えた。
何かクラスみんなに一体感みたいなものができた。

調査の結果から、今回の検証授業によって、生徒の「聴く」姿勢が前向きに変化していることが窺える。特に、「話を聴く姿勢が変わった」、「しっかりと聴くようになった」という意見が挙がったことは、傾聴を重視した話合いが、生徒の「聴く」力の向上に貢献したといえる。また、「発表したりする人が少し増えた」や「クラスで発言する人の数が増えた」という意見からは、傾聴が話し手の発話に対する意欲を高めることにつながったことが窺える。

Ⅸ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- 生徒の感想に見られるように、傾聴を重視した話合いにより、生徒が話しやすさを実感し、意見の言いやすい雰囲気を醸成することができた。
- 生徒のアンケートにおいて、「人が意見を言うときに、聴く姿勢が変わり、相づちが打てるようになった」や「自分から意見を言うことが増えた」といった感想があるように、生徒の人の話を聴く態度が変わり、話合いにおいて自分の意見を伝える生徒が増えた。
- 今回の検証授業をきっかけとして、生徒は普段の学校生活において、「友人同士で揉めることがなくなった」や「クラスに一体感が生まれた」といった感想を抱くなど、学級の人間関係に前向きな変化をもたらした。

2 今後の課題

- 2回の検証授業において、自己評価の低い生徒の状況を改善することができなかった。やはり、話合いの中で生徒が自信をもって意見を述べるためには、聴く力と併せて話す力の育成も必要である。
- 今回、研究対象となる学級においてのみ、傾聴の「トレーニング」と「自己評価」を取り入れた話合いを行った。したがって、2回の検証授業の中で実施できたのは、わずか3回のトレーニングにすぎない。今後は、全教職員の共通理解の下、これらの取組を各教科、道徳科、特別活動、総合的な学習の時間など、日々の学校生活において学校全体で実施できるような手立てについて考え、実践することが求められる。そして、生徒がより意欲的に自分の思いや考えを伝え合い、積極的な話合いを実現できるよう研究を継続したい。

参考文献・引用文献等

「学校でのピア・サポートのすべて」	(2002年12月 中野武房他 ほんの森出版)
「ピア・サポート実践ガイドブック」	(2008年4月 中野武房他 ほんの森出版)
「すぐはじめられるピア・サポート指導案&シート集」	(2002年12月 菱田準子 ほんの森出版)
「ピア・サポート力がつくコミュニケーションワークブック」	(2013年10月 岡田倫代 学事出版)
「児童心理『教師のための話す技術・聴く技術』」	(2015年12月 金子書房)
「児童心理『聞く力を育てる』」	(2013年12月 金子書房)
「話し合いを評価する力に関する一考察」	(2015年7月 上山信幸 広島大学)

